

日 本 言 語 テ ス ト 学 会 (JLTA)
第 23 回 (2020 年 度) 全 国 研 究 大 会 発 表 要 綱

Handbook
of
the 23rd Conference
of
the Japan Language Testing Association

Conference Theme:
Language Testing: Past, Present and Future

日 時 : 2020年12月12日 (土) 12:50-16:50

会 場 : オンライン開催 (Zoom)

主 催 : 日本言語テスト学会
(事務局)
〒036-8560 青森県弘前市文京町1
弘前大学教育推進機構 教養教育開発実践センター
横内裕一郎研究室
TEL: 0172-36-2111 (代表)
URL: <http://jlta.ac/>



The Japan Language Testing Association

Institute for Promotion of Higher Education, Center for Liberal Arts
Development and Practices, Hirosaki University, 1, Bunkyo-cho,
Hirosaki, Aomori, 036-8560, Japan
TEL: +81-0172-36-2111 (main switch number)
URL: <http://jlta.ac/>
E-mail: u16yoko@gmail.com

全国研究大会本部委員 (Annual Conference Committee)

渡部 良典 / Yoshinori WATANABE	(上智大学 / Sophia University)
横内 裕一郎 / Yuichiro YOKOUCHI	(弘前大学 / Hirosaki University)
小泉 利恵 / Rie KOIZUMI	(順天堂大学 / Juntendo University)
藤田 亮子 / Ryoko FUJITA	(順天堂大学 / Juntendo University)
金子 恵美子 / Emiko KANEKO	(会津大学 / University of Aizu)

全国研究大会運営委員 (Annual Conference Steering Committee)

金子 恵美子 / Emiko Kaneko	(会津大学 / University of Aizu)
熊澤 孝昭 / Takaaki KUMAZAWA	(東洋大学 / Toyo University)
周 育佳 / Yujia ZHOU	(東京外国語大学 / Tokyo University of Foreign Studies)
田中 洋也 / Hiroya TANAKA	(北海学園大学 / Hokkai-Gakuen University)
前田 昌寛 / Masahiro MAEDA	(金沢星稜大学 / Kanazawa Seiryō University)
渡部 倫子 / Tomoko WATANABE	(広島大学 / Hiroshima University)
前田 啓貴 / Hiroki MAEDA	(筑波大学大学院 / Graduate School, University of Tsukuba)

全国研究大会実行委員 (Annual Conference Executive Committee)

金子 恵美子 / Emiko Kaneko	(会津大学 / University of Aizu)
熊澤 孝昭 / Takaaki KUMAZAWA	(東洋大学 / Toyo University)
周 育佳 / Yujia ZHOU	(東京外国語大学 / Tokyo University of Foreign Studies)
田中 洋也 / Hiroya TANAKA	(北海学園大学 / Hokkai-Gakuen University)
前田 昌寛 / Masahiro MAEDA	(金沢星稜大学 / Kanazawa Seiryō University)
渡部 倫子 / Tomoko WATANABE	(広島大学 / Hiroshima University)
前田 啓貴 / Hiroki MAEDA	(筑波大学大学院 / Graduate School, University of Tsukuba)

研究発表審査委員 (Paper Presentation Abstract Reviewer)

金子 恵美子 / Emiko KANEKO	(会津大学 / University of Aizu)
周 育佳 / Yujia ZHOU	(東京外国語大学 / Tokyo University of Foreign Studies)
前田 昌寛 / Masahiro MAEDA	(金沢星稜大学 / Kanazawa Seiryō University)

Table of Contents (目次)

1. Presentation Schedule Overview (大会日程表)	2
2. Conference Announcement (大会参加者へのご案内)	4
3. Abstracts (発表要旨)	6
4. Advertisement/Commercial Exhibit Sponsors (広告・展示協賛企業)	16

日本言語テスト学会第 23 回全国大会プログラム

2020 年 12 月 12 日 (土)

12:50－13:00 開会行事

総合司会 清水 裕子 (立命館大学)
 挨拶 渡部 良典 (JLTA 会長・上智大学)

13:05－14:45 研究発表 I・II・III (発表 20 分, 質疑応答 10 分)

14:45－15:00 休憩

15:00－16:05 研究発表 IV (Room 2)・賛助会員発表 (VI・V) (発表 20 分, 質疑応答 10 分)

16:10－ 閉会行事&JLTA 最優秀論文賞授与式

司会 齋藤 英敏 (茨城大学)
 2019 年度 JLTA 最優秀論文賞受賞者 加藤 剛史 (筑波大学大学院生)

16:30－16:50 JLTA 総会

議長選出
 報告 横内 裕一郎 (JLTA 事務局長・弘前大学)

Presentation Overview

Time	Part	Room1	Room2
13:05 – 13:35	I	前田	CARDWELL † LAFLAIR
13:40 – 14:10	II	佐藤	高波
14:15 – 14:45	III	静	Watanabe-Kim †
14:45 – 15:00		Break	
15:00 – 15:30	IV	静 望月	岡
15:35 – 16:05	V	CONNOR	青山

†Assessment practice presentation

Presentation Details

Room1

Session Chair Part I & II: Tomoko WATANABE (Hiroshima University)

Session Chair Part III & IV: Hiroya TANAKA (Hokkai-Gakuen University)

Session Chair Part V: Masahiro MAEDA (Kanazawa Seiryō University)

Part	Presenter (Affiliation)	Title (Page)
I 13:05 – 13:35	前田 啓貴 (筑波大学大学院)	L2 スピーキングの複雑さ, 正確さ, 流暢さ指標に基づく CEFR レベルの分類と予測: ランダムフォレストによる検討(p. 6)
II 13:40 – 14:10	佐藤 剛 (弘前大学)	小学生の語彙サイズの縦断的調査 (p. 7)
III 14:15 – 14:45	静 哲人 (大東文化大学)	VELC Test®スコアで新 TOEIC® L&R Test スコアを予測する 一式をアップデートする必要があるのか— (p. 8)
IV 15:00 – 15:30	静 哲人 (大東文化大学) 望月 正道 (麗澤大学)	VELC Test® Online と VELC Test® P&P の等価性を検証する (その 2) (p. 13)
V 15:35 – 16:05	Stuart CONNOR (Pearson Japan)	Gain Insight, Measure Progress and Target Your Teaching - Introducing the Pearson English Benchmark Test (p. 14)

Room2

Session Chair Part I & II: Takaaki KUMAZAWA (Toyo University)

Session Chair Part III & IV: Yujia ZHOU (Tokyo University of Foreign Studies)

Session Chair Part V: Hiroki MAEDA (University of Tsukuba)

Part	Presenter (Affiliation)	Title (Page)
I 13:05 – 13:35	Ramsey CARDWELL (Duolingo) Geoff LAFLAIR (Duolingo)	The Duolingo English Test: Promoting Test Access and Security Through Innovative Item Development (p. 9)
II 13:40 – 14:10	高波 幸代 (中央大学人文科学研究所)	スペリングテストの難易度は何で決まるのか: MIMIC モデルによる予備的検証 (p. 10)
III 14:15 – 14:45	Izumi Watanabe-Kim (International Christian University, Sophia University)	Test Takers' Accounts of Source-Incorporated Writing and Plagiarism Test (p. 11)
IV 15:00 – 15:30	岡 秀亮 (筑波大学大学院)	L2 ライティングにおける正確性指標—指標間の関係性に着目して— (p. 12)
V 15:35 – 16:05	青山 智恵 (ケンブリッジ大学英語検定機構)	Linguaskill リンガスキルの過去・現在・未来 (p. 15)

Conference Announcement

■ *Registration*

1. Pre-registration is required to attend the conference. The registration link will be announced at the end of November. Registration information will be announced on the JLTA official homepage, e-mail list, and Twitter. Please note that there will be no registration available on the day of the conference.
2. Registration is free for both JLTA members and non-members for 2020 only.

■ *Presentation guidelines*

1. Presentations will be held in Room 1 and Room 2. Please visit the special website and click the link to enter the room you wish to join.
2. During the presentations and Q & A sessions, you will need permission from the chair or presenter to turn on your video and microphone.
3. If you have a question, please press the “Raising Hand” button. After the chair calls on you, turn on the microphone and speak. When you have finished speaking, please be sure to mute your microphone again.
4. During a presentation, participants can ask questions using the chat tool. Please note that your comments will be shared with all other participants.
5. The presentations will not be recorded, and presentation videos will not be shared with the public after the conference.

■ *Emergency contact information*

u16yoko@gmail.com (Yuichiro Yokouchi, Secretary General of JLTA)

For the speakers

1. The time limits are as follows: presentation, 20 minutes; Q&A session, 10 minutes. These time limits should be strictly observed. The starting time of a presentation might change depending on the time used in previous presentations. In this case, the starting time will be adjusted using some of the break time.
 2. Follow all instructions given by the chair.
 3. Speakers should enter the room 15 minutes before their presentations begin.
 4. If you need a presentation certificate, please contact u16yoko@gmail.com (Yuichiro Yokouchi, Secretary General of JLTA).
 5. We will test the connection on Friday, December 11th, from 1:00 PM to 4:00 PM. If you would like to test your connection at that time, please log in to the URL that will be provided to you later. (Note: you will not be able to test the connection on the day of the conference.)
-

大会参加者へのご案内

■ 受付

1. 本大会の参加には事前申込みが必須です。申し込みサイトは 11 月末を目処に公開予定です。公開次第、JLTA 公式 HP、メーリングリスト、Twitter で案内いたします。なお、当日申し込みはございませんのでご注意ください。
2. 参加費は、2020 年度に限り、JLTA 会員・未会員ともに無料です。

■ 発表視聴時のお願い

1. 発表は Room 1 と Room 2 で実施されます。ご覧になりたい発表会場へは特設ページ内にあるリンクをクリックして会場にお入りください。
2. 発表中・質疑応答中は司会者・発表者の指示なくカメラやマイクをオンにしないようにしてください。
3. 質問の際は挙手ボタンを押し、司会者から指名が入ってからマイクをオンにし、発言してください。発言を終えたら再度必ずマイクをオフにしてください。
4. 発表中にチャット機能を用いて質問を投稿することが可能です。質問は視聴者全体に情報が共有されます。
5. 発表は録画されませんので、後日発表のビデオが公開されることはありません。

■ 緊急連絡先の E メールアドレス

ul6yoko@gmail.com（横内裕一郎、JLTA 事務局長）

発表者へのご案内

1. 20 分の発表と 10 分の質疑応答の時間があります。時間厳守をお願いします。
2. 発表開始時間は直前の発表の状況に応じて若干のずれが生じる場合があります。その場合、休憩時間を使って時間の調整を行います。
2. 司会者の指示に従って発表を行うようにしてください。
3. 発表者はご自身の発表 15 分前までには確実に発表会場に入室してください。
4. 発表証明書などが必要な方は、ul6yoko@gmail.com (横内裕一郎, JLTA 事務局長) までご連絡ください。
5. 12 月 11 日（金）13：00～16：00 までの時間、接続テストを行います。念の為接続確認をされたいという方は、この時間に指定された URL へログインしてください。この URL は後日改めてご案内いたします。当日に接続テストを行うことはできません。

3. Abstracts (発表要旨)

Paper Session

Room1 Part I (13:05-13:35)

L2 スピーキングの複雑さ、正確さ、流暢さ指標に基づく CEFR レベルの分類と予測：ランダムフォレストによる検討

前田 啓貴 (筑波大学)

近年、多くのテスト機関が、ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) に基づき、学習者の熟達度を A1 から C2 に分類してフィードバックを行なっている。スピーキングの評価では、テスト機関によって様々な観点から評価が行われているが、複雑さ、正確さ、流暢さ (CAF) の観点が含まれていることが多い。CEFR のレベルとパフォーマンスにおける CAF の特徴は、スピーキングの評価だけでなく指導においても重要な役割を果たしていることから、これらの関係を明らかにすることは、英語教育のさまざまな分野に大きく貢献すると考えられる。そこで、本研究では、CAF に基づく指標を用いてスピーキング熟達度をどの程度正確に分類または予測できるのかを、ランダムフォレストを用いて検証した。2018 年度に行われた Test of English for Academic Purposes (TEAP) のスピーキングセクションの受験者から、159 人の発話データ (Below A2: $n = 39$, A2: $n = 40$, B1: $n = 40$, B2: $n = 40$) をランダムに抽出し、先行研究 (e.g., Nakatsuhara, 2014) に基づく 17 の指標を算出した。その後、ランダムフォレストを用いて CEFR レベルの分類と予測を行った。ランダムフォレストとは、決定木のアンサンブル学習により、高い精度で目標変数の分類や予測が可能な機械学習の一種である。非線形の変数を使用できることや線形分離が不可能なデータを分類できるなどの利点がある。分析の結果、全データを用いた CEFR レベルの分類では、74.21% の精度で分類することができた。また、学習用データセットとテスト用データセットに分け、分類器による CEFR レベルの予測を行った結果、81.25% の正確さで CEFR レベルを予測することができた。分類と予測に貢献した指標の上位 5 つは、テスト全体の語数、AS-unit 中の平均語数、AS-unit の数、1AS-unit あたりの従属節の数、スピーチタスク中の平均語数であり、その後に正確さやその他の指標が続く結果となった。発表では、これらの結果に加え、決定木分析による結果などを踏まえて、CEFR レベルとパフォーマンスの特徴について総合的に議論する。

Keywords

スピーキング, CAF, 言語テスト, ランダムフォレスト

小学生の語彙サイズの縦断的調査

佐藤 剛 (弘前大学)

本研究は、2020 年度より教科としての英語の指導が開始された小学生の語彙サイズの実態とその伸長の過程を明らかにすることを目的とするものである。平成 29 年度告示の学習指導要領において、小学校の英語授業で指導される語彙数は 600 語から 700 語程度とされているが、実際の児童は学習開始時と卒業時にどれくらいの語彙サイズを持っているのかという観点から、この基準設定の妥当性と実証した研究は行われていない。そこで、公立小学校に通う児童 41 名の語彙サイズを 5 年次と 6 年次の 2 年間、佐藤（2019）が開発した小学生用のリスニング語彙サイズテストを用いて、それぞれ 7 月と 2 月、合計 4 回縦断的に測定した。その結果、小学生は 5 年生の 7 月時点でも 437.50 語の語彙サイズを持っており、小学校での英語教育を終えた時点での語彙サイズは、586.98 語から 650.02 語程度と推定された。さらに、児童の語彙サイズの平均値をテストの実施時期×語彙レベルの 2 要因の二元配置の分散分析で比較した結果、交互作用は $F(3, 312) = 4.27$, $p = .006$, $\eta^2 = .02$ (small effect size)、さらに、テストのレベルの主効果は $F(1, 312) = 206.29$, $p < .001$, $\eta^2 = .32$ (large effect size)、テストの実施時期の主効果は $F(3, 312) = 40.55$, $p < .001$, $\eta^2 = .19$ (large effect size) であり、いずれも有意であった。そのため単語の頻度レベルに応じて語彙サイズが不均等に増加していることが示唆された。このことから、小学校の英語の授業で扱うべき英単語数として学習指導要領に示されている 600 語～700 語程度という基準は妥当であると判断される。また、単語の特徴、特に各グループに含まれる各レベルの品詞の割合が語彙学習の難易度に関係していることが明らかになった。これらの結果は、日本人小学生の語彙指導や教材開発のための重要な基礎データとして、貴重な指針となるものであると考えられる。

Keywords

語彙サイズ, 小学生, 縦断的調査

Room1 Part III (14:15-14:45)

VELC Test®スコアで新 TOEIC® L&R Test スコアを予測する ー式をアップデートする必要があるのかー

静 哲人 (大東文化大学)

This study examined the current formula for predicting TOEIC® L&R scores from the VELC® Test scores, with a post-2016 data set, i.e., scores on the renewed TOEIC® Test. A total of 112 L1-Japanese university students sat for the VELC Test® administered sometime between December 2019 and March 2020. They either had a known post-2016 TOEIC® score or sat for the TOEIC® Test on the same day that they took the VELC Test®. Their predicted TOEIC® scores computed by the formula from a regression analysis of a pre-2016 data set (i.e. based on the “old” TOEIC®) were compared against their actual TOEIC scores. The results indicate that the VELC Test® continues to predict post-2016 TOEIC® scores to the same satisfactory extent as it did pre-2016 TOEIC® scores, meaning that there is no need to update the current prediction formula. Meanwhile, the gaps between the actual and the predicted TOEIC® scores turn out to correlate weakly but positively with the predicted TOEIC® scores, indicating that the predicted scores tend to be lower than the actual scores toward the high end of the score spectrum and higher than the actual scores toward the lower end of the score spectrum.

Keywords

VELC Test, TOEIC L&R, prediction, correlation

The Duolingo English Test: Promoting Test Access and Security through Innovative Item Development

Ramsey CARDWELL (Duolingo)

Geoff LAFLAIR (Duolingo)

†Assessment practice presentation

The Duolingo English Test (DET) is unique among high-stakes English proficiency tests in its innovative machine learning (ML)– and natural language processing (NLP)–based approach to item development. This presentation will describe the ML/NLP models’ development and use to estimate item difficulties without item piloting, allowing the DET to provide unprecedented testing access (geographically, temporally, financially) without compromising test security. We will also summarize the validity evidence for this process documented in Settles, LaFlair, & Hagiwara (2020).

The DET is a computer adaptive test (CAT) measuring English language proficiency—including literacy, conversation, comprehension, and production—for purposes including higher-ed admissions. It costs \$49 (~¥5,175), requires ~1 hour, and can be taken anytime and anywhere on an internet-connected computer. Over 2,000 educational institutions worldwide accept DET scores, including 22 undergraduate and graduate programs in Japan.

To represent the range of skills within the English proficiency construct, the DET comprises seven item types: C-test, yes/no vocabulary (written and audio), dictation, elicited imitation, extended speaking, and extended writing. The first five types are based on two ML/NLP models: the vocabulary and passage models. The vocabulary model is a weighted-softmax multinomial regression model trained on CEFR–labelled English words to predict a (pseudo-)word’s CEFR level. The passage model was similarly trained on CEFR–labelled and open-source passages. An item’s difficulty is assigned as the weighted sum over the posterior distribution of the appropriate model. This scalable approach allowed the automatic generation of 25,000+ test items.

The DET’s large item bank is key to ensuring security. The average item exposure rate (percent of test sessions in which an item appears) is 0.1%, or 1 in 1000 tests. Thus, examinees cannot gain an advantage by taking the test repeatedly or reviewing leaked items. Additionally, examinees’ identities are verified against government-issued ID, and each test session is recorded via webcam and proctored asynchronously.

Robust test security allows the DET to be administered online and on-demand, greatly improving equitable access. In addition to a lower fee than comparable tests, the DET does not require traveling to a test center. Thus, the DET’s innovative ML/NLP–based approach to test item development is pushing the boundaries not only of assessment technology, but also of equitable access to testing. The DET is thereby lowering barriers to education for students around the world while helping educational institutions achieve a more geographically and socioeconomically diverse applicant pool.

Keywords

automatic item generation, machine learning, natural language processing, test security

スペリングテストの難易度は何で決まるのか：MIMIC モデルによる予備的検証

高波 幸代 (中央大学人文科学研究所)

本研究の主な目的は、スペリングテストの難易度に影響を与える要因を特定することである。書き取りテスト (ENC) と多肢選択式 (MC) スペリングテストを取り上げ、①書き取り (ENC)、②多肢選択式和訳なし (MC-)、③多肢選択式和訳あり (MC+)、の3形式による比較検証を行った。使用データは、2017年から2019年にかけて収集した英語専攻の日本人大学生184名の回答である ($N = 184$)。まず、調査協力者を3群に分けてグループ(3)×テスト形式(3)の2要因混合計画の分散分析を行った結果、有意な交互作用が見られた。下位検定の結果、推定語彙サイズが3,500語未満の学習者はMCへの回答の際、「和訳」に依存する傾向が見られたが、推定語彙サイズが5,000語以上の学習者は和訳の有無に関わらず正答していた。次に、ラッシュ・モデルによる項目分析を行った結果、MCの項目難易度は和訳提示の有無によって異なっていた。さらに、スペリングテストの難しさに影響を与える要因を特定するためにMIMIC (Multiple Indicators Multiple Causes) モデルによる分析を行った。項目分析により得られたスペリングテスト3形式の難易度を従属変数とし、原因となる観測変数 (独立変数) には「語彙の難しさに影響を与える要因 (Nation & Webb, 2011, pp.314-315)」などを含め、それらの説明を受ける潜在変数に「難しさの要因」を設定した。その結果、学習者の印象に基づく語彙の「親しみやすさ」と語彙の「頻度」が、「難しさの要因」に有意な影響を与えていた。しかしながら、ENCでは潜在変数を介するよりも学習者の印象に基づく語彙の「発音しやすさ」の方が、より直接的に有意な影響を与えていた。一方、MCテストにおいては、語彙の様々な特徴を含む潜在変数である「難しさの要因」がMC-とMC+の難易度に影響を与えていたが、この影響をより強く受けていたのはMC-であった。以上のことから、スペリングテストの持つ特徴によって、その難易度に影響を与える要因は様々であることが示唆された。

Keywords

スペリング能力, スペリングテスト, 項目分析, MIMIC モデル, 語彙の難しさ

Test Takers' Accounts of Source-Incorporated Writing and Plagiarism Test

Izumi WATANABE-KIM (International Christian University, Sophia University)

†Assessment practice presentation

While Japanese university students have been made aware of the importance of proper source use in academic writing (Wheeler, 2009; Yoshimura, 2015), the most frequent use of writing assessment continues to be the “impromptu essay writing tasks” (Plakans, 2008) where they write on a “general” topic without any source use. Besides, L2 writers receive little reading-to-write instructions in academic writing (LoCastro and Masuko, 2002; Pecorari, 2008), and consequently, high rates of plagiarism are reported (Keck, 2006, 2014; Pecorari, 2003).

Past research has looked into the citation behaviors of Asian L2 writers and discussed the causes of plagiarism. Some argue that it is due to their cultural background and orientation to learning (Baker, 1997; Currie, 1998), while others claim that it is the lack of knowledge of citation conventions (Wheeler, 2009) or English language proficiency (Howard, 1995; Pecarori, 2008). Despite different views, there seems to be an agreement on providing more instructions and developing assessment tools (Storch, 2012). However, little attention is paid to assessing L2 writers' knowledge of plagiarism, and how best to utilize such assessment practices for student learning.

The current practice attempts to fill a gap between institutional policy, instruction, and assessment by developing an in-class assessment tool to measure plagiarism knowledge. It will report on the process of developing a 40-item multiple-choice test in three stages, from defining the test construct to piloting test items and revising them. In particular, it will focus on the piloting stage where participants provided feedback on 1) classroom writing experience (with use of a direct quote, paraphrase, and summary), 2) test-taking, and 3) revision of their writing after seeing the test results. Test takers' accounts of these experiences were elicited via survey, interviews, and writing samples. Simultaneously, both Japanese and non-Japanese EFL instructors and graduate school students of applied linguistics took the test and commented on their experience.

The feedback raised many revision points, such as how the test-takers' thinking process might mislead them to choose a wrong answer or how the reading difficulty of prompt text can impact the test results. Although there was wide-ranging feedback provided by different groups of participants, they seem to agree on one point; how assessment can promote learning. Also, there were indications found in traces of revision of student writing that declarative knowledge of plagiarism may lead to procedural knowledge.

Keywords

L2 reading-to-write, plagiarism, test taker feedback

L2 ライティングにおける正確性指標—指標間の関係性に着目して—

岡 秀亮 (筑波大学)

本研究の目的は、L2 ライティングにおける正確性を測定するために、近年提唱された指標である **weighted clause ratio (WCR)** と従来から使用されてきた正確性指標との関係性を明らかにすることである。L2 ライティングにおける正確性は、近年では、誤りのない節に基づく正確性指標 (e.g., **the ratio of error-free clauses over all clauses: EFCR**) を用いることで、正確性を適切に測定できるとされている (Wigglesworth & Foster, 2008)。一方で、これらの指標では、節内にどのような誤りがあったとしても、同じものとして扱われてしまうため、正確性の細かい違いを捉えきれていないという批判もあった (e.g., Polio, 1997)。そこで、Wigglesworth and Foster (2008) は、「節内にある誤りが読み手の理解度に与える影響に応じて、節に与える得点を変える」WCR を提唱した。WCR を用いることで、より細かく節を評価できるため、誤りの有無だけで判断していた正確性指標では見過ごされていた小さな違いも捉えることが可能となった (e.g., Evans et al., 2014)。一方で、WCR のように、誤りが読み手の理解度に与える影響を考慮する指標は、正確性ではなく異なる概念 (e.g., **comprehensibility**) を測定しているという指摘がある (Pallotti, 2009)。ゆえに、WCR と従来の正確性指標との間にある関係性は明らかになっているとは言えない。そこで本研究は、ICNALE コーパスにある日本人英語学習者が作成した2つの英作文 (N=100) を対象に、WCR と従来から使用されている複数の正確性指標との間にある関係性を調査した。相関分析の結果、WCR は従来から使用されている複数の正確性指標と強く関連していることがわかった (e.g., WCR-EFCR: $r = .86$)。また、英作文のトピックが変わったとしても、この関係性はほぼ維持されていることがわかった。これらのことから、WCR は従来の正確性指標と同様の構成概念を測定している可能性が示唆された。

Keywords

ライティング, 評価, 正確性

賛助会員発表 (Institutional Member Presentations)

Room1 Part IV (15:00-15:30)

VELC Test® Online と VELC Test® P&P の等価性を検証する (その 2)

静 哲人 (金星堂, 賛助会員として)
望月 正道 (金星堂, 賛助会員として)

VELC Test ®は 2012 年度から日本語を母語とする大学生のための英語力熟達度テストとして実施されてきた。2020 年初頭からの新型コロナウイルスの感染拡大のため、対面なしで実施できる VELC Test® Online を開発し、2020 年 7 月から運用を開始している。VELC Test® Online (以下 OL) は、従来のペーパー版の VELC Test® (PP) をそのままオンライン化したものであり、モードの違いがテスト項目の振る舞いに影響するとは考えにくい、本研究では OL が実際に PP と等価であるかを受験データにより検証した。

C 大学 S 学部は 2019 年度に 217 名が PP を、2020 年度に 342 名が OL を受験し、T 学部は 2019 年度には 288 名が PP を、239 名が OL を受験した。2019 年度 PP と 2020 年度 OL の VELC スコアを比較するといずれの学部でも後者が格段に高かった。しかし C 大学担当者からの情報を勘案し、この差はテストモードによるものでなく異なる集団の実際の英語力の差を反映しているものと解釈した。

次に 2019 年度に PP を受けた 505 名と、2020 年度に OL を受けた 1679 名の生データを Winsteps で分析したところ、受験者信頼性、受験者階層の数値に、PP と OL の差は認められず、それぞれの受験者集団を十分な程度に弁別していた。さらに 2020 年度 OL で使用した 120 項目の Rasch モデル適合度について Infit Mean Square で確認したところ、1.5 を上回る 6 項目 があったものの最高が 1.8 であり、全体の適合度に問題はないと解釈した。

最後に 2020 年度の C 大学の OL データを、同一フォームを用いた 2019 年度の他大学の PP データと比較して、PP と OL で同一項目の難度が変化するかを確認した。120 項目すべての正答率のモード間の相関は $r = .825$ であった。項目タイプでまとめてみると、タイプの異なる項目グループ同士の相対的難易度のパターンは、モードを超えて共通しており、リスニング項目群のほうがリーディング項目群よりも難しく、リスニングのなかでは $L1 < L2 < L3$ 、リーディングの中では $R1 < R2 < R3$ であった。

以上を総合すると、PP と OL の間には、モードによる差異はないと解釈して構わないと思われる。

Keywords

VELC Test, オンライン版, ペーパー版, 等価性

Room1 Part V (15:35-16:05)

Gain Insight, Measure Progress and Target Your Teaching - Introducing the Pearson English Benchmark Test

Stuart CONNOR (Pearson Japan)

Every language learning journey is unique. The Benchmark Test from Pearson takes the time, complexity and subjectivity out of the assessment process, making it quick and easy to measure real progress accurately and consistently. Backed by years of expert research, this straightforward yet powerful tool can be used alongside any English course, delivering the clarity, personal guidance, and motivation to smooth and accelerate the journey to fluency. Use the Benchmark Test across all students, classes, levels and even schools, to gain comparative insights that can help to optimise your entire teaching programme. The Benchmark Test is powered by Pearson's market-leading artificial intelligence technology that allows you to measure all 4 skills in an integrated 45-minute test that returns immediate and actionable diagnostics. Use the Benchmark Test across all students, classes, levels and even schools, to gain comparative insights and help optimise your entire teaching programme.

Keywords

4-skill, artificial intelligence technology

Room2 Part V (15:35-16:05)

Linguaskill リンガスキルの過去・現在・未来

青山 智恵 (ケンブリッジ大学英語検定機構)

新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、対面式スピーキングテストを含むケンブリッジ英語検定は2020年3月から約3ヶ月の間、延期・中止措置を講じました。試験実施につきましては、日本を含む世界各国のすべての認定試験センターにおいて、国や地方自治体、医療当局等から発表される指針に準拠し試験を実施致しました。コロナ禍で、通常の試験実施規則の一部を緩和しましたが、試験の質、資格の国際通用性等に影響を与えることはありませんでした。どのような工夫を講じ、受験者の希望に応えたかについて報告させていただきます。

その一方で、試験遠隔監視システムを利用し自宅での受験が可能なオンラインテスト「Linguaskill リンガスキル」の需要が急速に高まりました。世界、そして日本でも新型コロナウイルス感染症拡大の最中、感染リスクを抑え安全に自宅で受けることができるリンガスキルは、外出制限が解かれコロナと共に生活する「With コロナ」の現在においても引き続き世界中で活用されています。また、リンガスキルは世界そして日本でも外部試験の一つとして大学入試で活用されており、試験会場に移動することなく受験できるため、離島・へき地の受験者に受験機会を公平に担保できる手段として、コロナ禍が終息した後も貴重な大学入試のソリューションとして評価されるのではないかと考えます。今年度の日本言語テスト学会 (JLTA) 第23回【遠隔】全国研究大会では、「リンガスキルの過去・現在・未来」と題し、リンガスキルの最新情報をご紹介します。

Keywords

ケンブリッジ英語検定, Linguaskill リンガスキル, 遠隔試験監督システム, LINE スタディ公式アカウント

Linguaskill▶▶

最先端のAI技術で採点する
オンライン英語テスト「リングスキル」登場

ケンブリッジ大学グループが
ビジネスパーソン、就活生の
英語力証明を応援中!



ケンブリッジ大学
英語検定機構

cambridgeenglish.org/jp

お問い合わせTEL:
03-3518-8276

Linguaskill▶▶

最先端のAI技術で採点する
オンライン英語テスト
「リングスキル」登場

遠隔試験監督システムにより
在宅受検が可能に!



ケンブリッジ大学
英語検定機構

cambridgeenglish.org/jp

お問い合わせTEL:
03-3518-8276



Cambridge English Write&Improve



ケンブリッジの「Write & Improve + Class View」ツールを使えば、生徒の英作文の課題を簡単に設定、採点、成績管理できることをご存知ですか?

生徒のライティングスキルの向上をモニターでき、個別にフィードバックできるから便利です!

今日から無料トライアルを始めましょう:
<https://writeandimprove.com/classview>

お問い合わせ:
ケンブリッジ大学英語検定機構
試験開発部門 日本統括オフィス
e-mail: InfoJapan@cambridgeenglishreps.org

*「+Class View」推奨ブラウザ:
Google Chrome、Firefox



世界で行われた最初
の英語4技能試験

**The original
four-skills English
language test**

For English language skills trusted by millions, trust IELTS

More than 10,000 organisations accept IELTS scores, including over 3400 institutions in the US.

IELTS tests the English skills that people need to live, study and work around the world.

Visit ielts.org

世界的に認知度が高く、 最も信頼されているのが IELTS

- ・ IELTSは米国の3,400以上の教育機関を含め世界中で10,000以上の機関に認定されています
- ・ IELTSは英語圏での留学・就労・移住を希望する方のための英語技能テストです

詳しくはielts.orgをご覧ください

IELTS™

 **BRITISH
COUNCIL**

 **idp**

 **Cambridge Assessment
English**

IELTS is jointly owned by the British Council, IDP: IELTS Australia and Cambridge Assessment English.
IELTSは、ブリティッシュ・カウンシル、IDP: IELTS オーストラリア、ケンブリッジ大学英語検定機構 が共同所有しています



Level Test

For Placement 学習者のレベル分けに

- ・アダプティブ方式
- ・試験時間：
 - 3 技能タイプ：約 20 分
 - 4 技能タイプ：約 30 分

www.pearson.co.jp/level-test/

4技能を測定

採点が早い

CEFR
完全準拠

オンライン
テスト



Benchmark Test

For Benchmarking 学習進捗の把握に

- ・レベル別 4 タイプ
- ・複数回を継続的に受験することで進捗を可視化
- ・試験時間約 45 分

www.pearson.co.jp/benchmark-test/



Pearson Japan KK
ピアソン・ジャパン株式会社
www.pearson.co.jp



Pearson

VELC Test[®] Online

[ベルクテスト・オンライン]

Visualizing English Language Competency Test Online

VELC Test にオンライン版が登場！

インターネット接続ができる環境であれば、PC、タブレット、スマホで受験可能

- 試験内容・問題構成はこれまでの紙ベースのものと変わりません
- 試験時間 70 分（120 問）の通常版と試験時間 55 分（90 問）の短縮版を選択いただけます
- 紙ベース版とオンライン版で同等の試験結果を出すことは実証済みです

2020 年度はサービス価格で 800 円（税別）/1 人

2021 年度より 900 円（税別）/1 人（同一校の年間受験者数 500 人以上で 800 円（税別）に割引）
ご質問やデモの申し込みはホームページよりお願いします

VELC 研究会事務局（株式会社金星堂内）

東京都千代田区神田神保町 3-21（〒101-0051）

tel. 03 (3263) 3828 fax 03 (3263) 0716 e-mail: info@velctest.org

<https://www.velctest.org/>

詳しくはこちら
をご覧ください



＜協賛企業・法人・団体の一覧（50 音順）＞

IELTS *

British Council, IDP: IELTS Australia, Cambridge Assessment English
<https://www.ielts.org>

ケンブリッジ大学英語検定機構 *

Cambridge Assessment English
<https://www.cambridgeenglish.org/jp>

ピアソン・ジャパン株式会社 *

Pearson Japan **<https://www.pearson.co.jp/>**

VELC 研究会（事務局 株式会社 金星堂） *

Research Group for Visualizing English Language Competency
<https://www.velctest.org/index.html>

We would like to greatly acknowledge 4 companies, organizations, and groups for their support.

本大会にあたり以上の4の企業・法人・団体様より
大会運営のご支援を賜りました。厚く御礼申し上げます。

The conference information of JLTA2021 will be announced via the JLTA website as soon as the details become available. We look forward to seeing you there.

2021 年度の日本言語テスト学会全国研究大会は、詳細が決まり次第、JLTA のホームページでお知らせいたします。ご参加のほどよろしく願いいたします。

日本言語テスト学会 (JLTA) (2020 年度) 全国研究大会発表要綱
Handbook of the 23rd Conference of the Japan Language Testing Association
発行日：2020 年 12 月 1 日
発行：日本言語テスト学会 (JLTA) 会長：渡部良典 (上智大学)
事務局：〒036-8560 青森県弘前市文京町1
弘前大学教育推進機構 教養教育開発実践センター
横内裕一郎研究室 TEL: 0172-36-2111 (代表)
E-mail: y.yokouchi@hirosaki-u.ac.jp
編集：全国研究大会実行委員会
印刷：株式会社国際文献社 〒162-0801 東京都新宿区山吹町358-5
TEL: 03-5937-0249 FAX: 03-3368-2822
